



集 歌

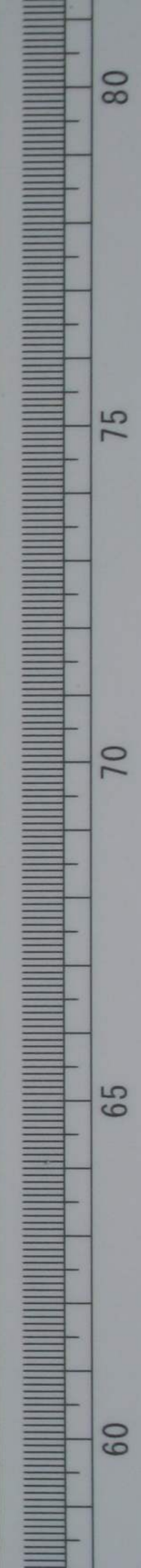
太 陽 之 薔 薇

與 謝 野 晶 子 著



1921

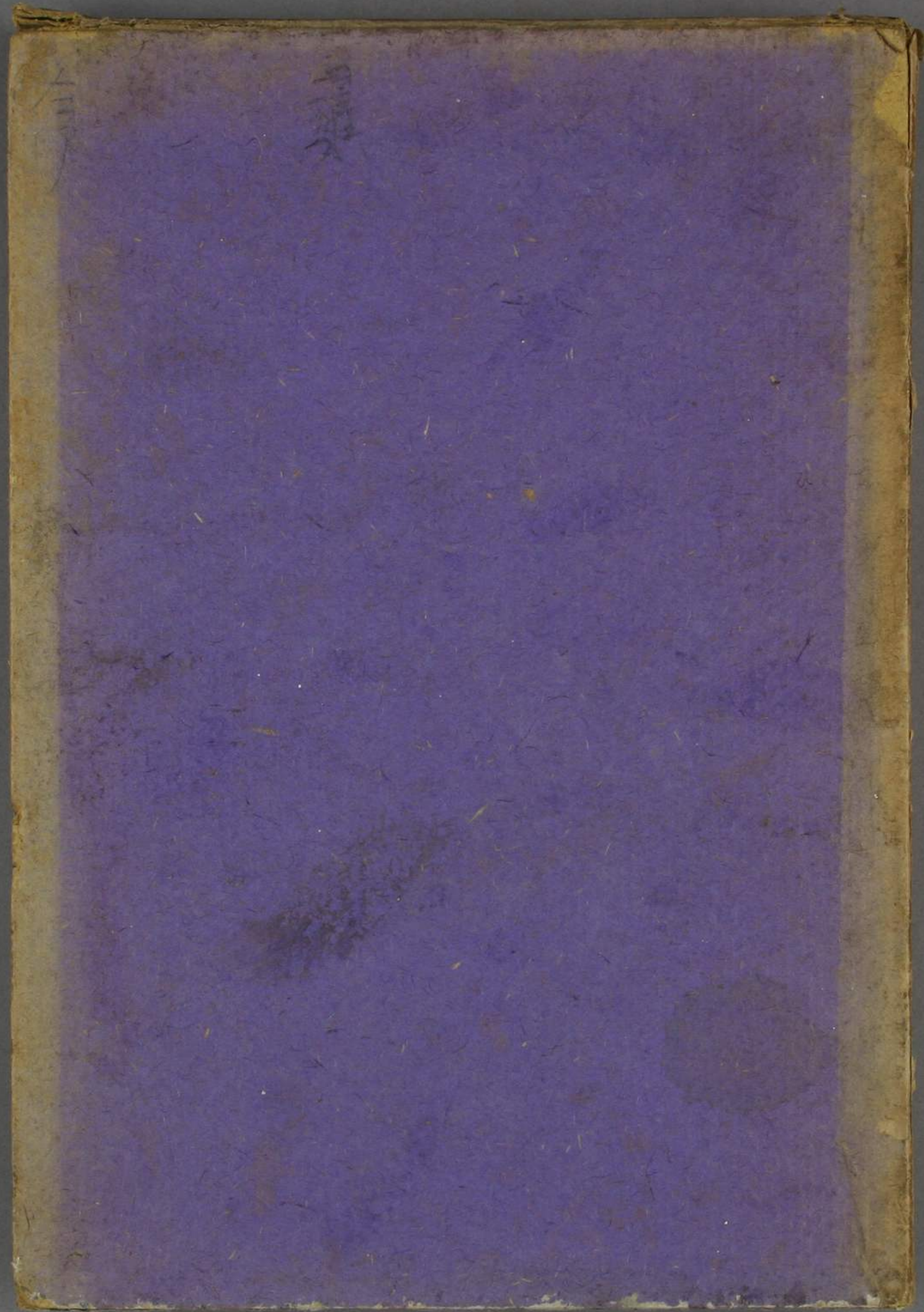
A R S

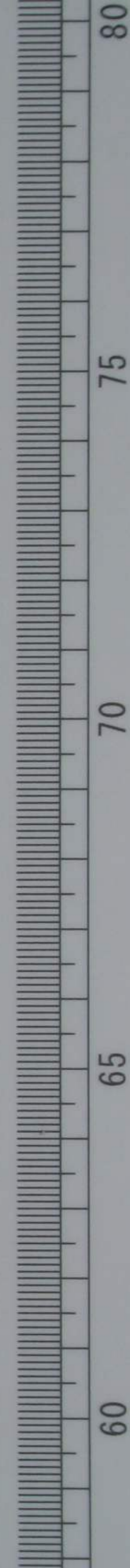
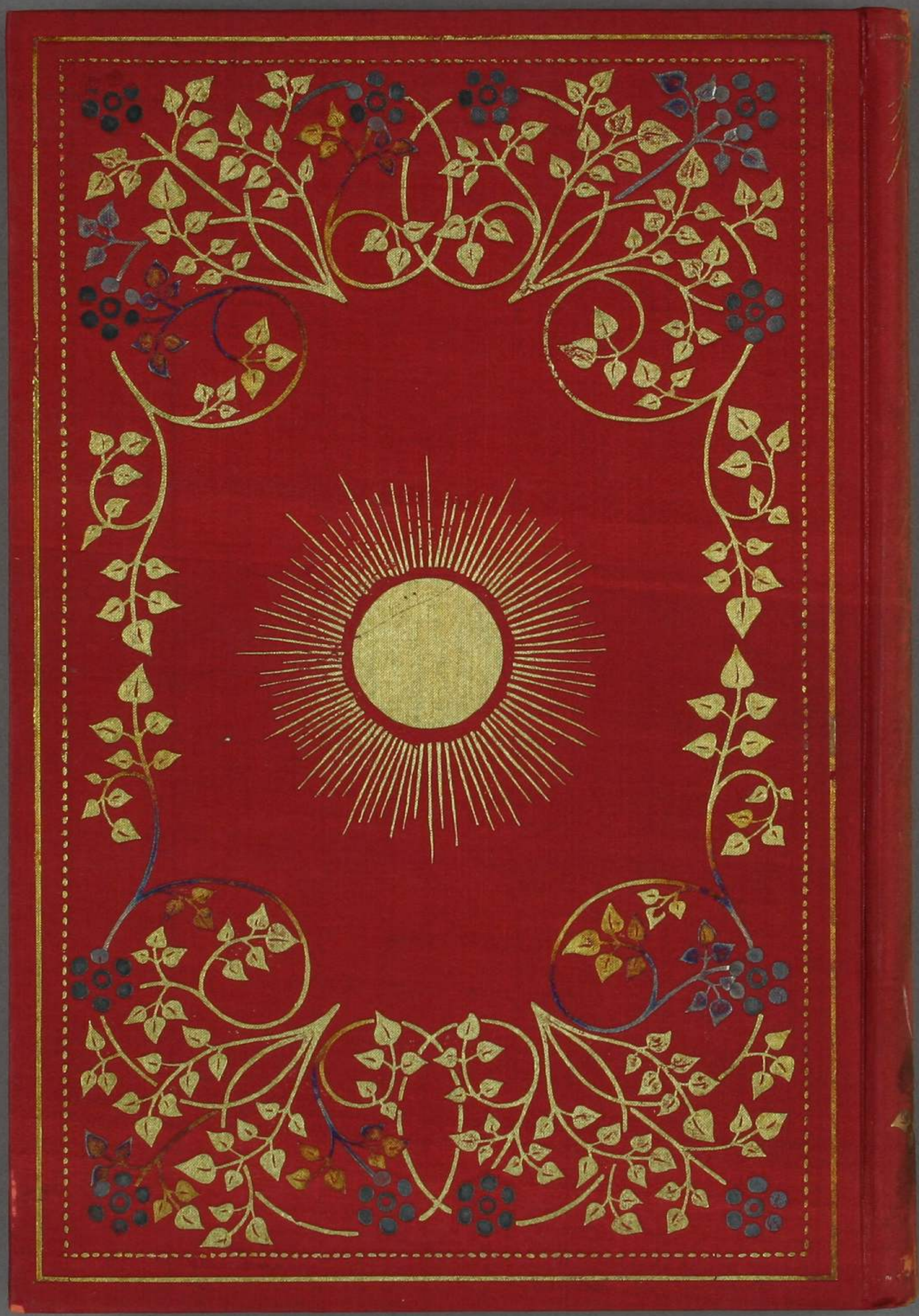
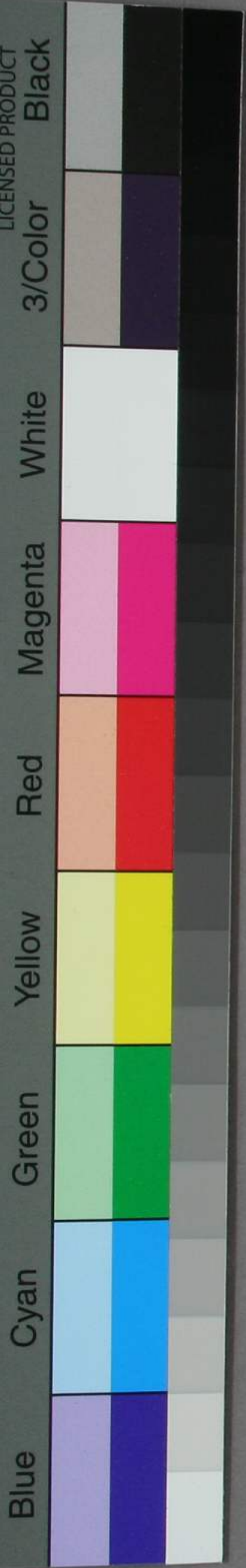


歌集
太陽と普回
徴

上野野子







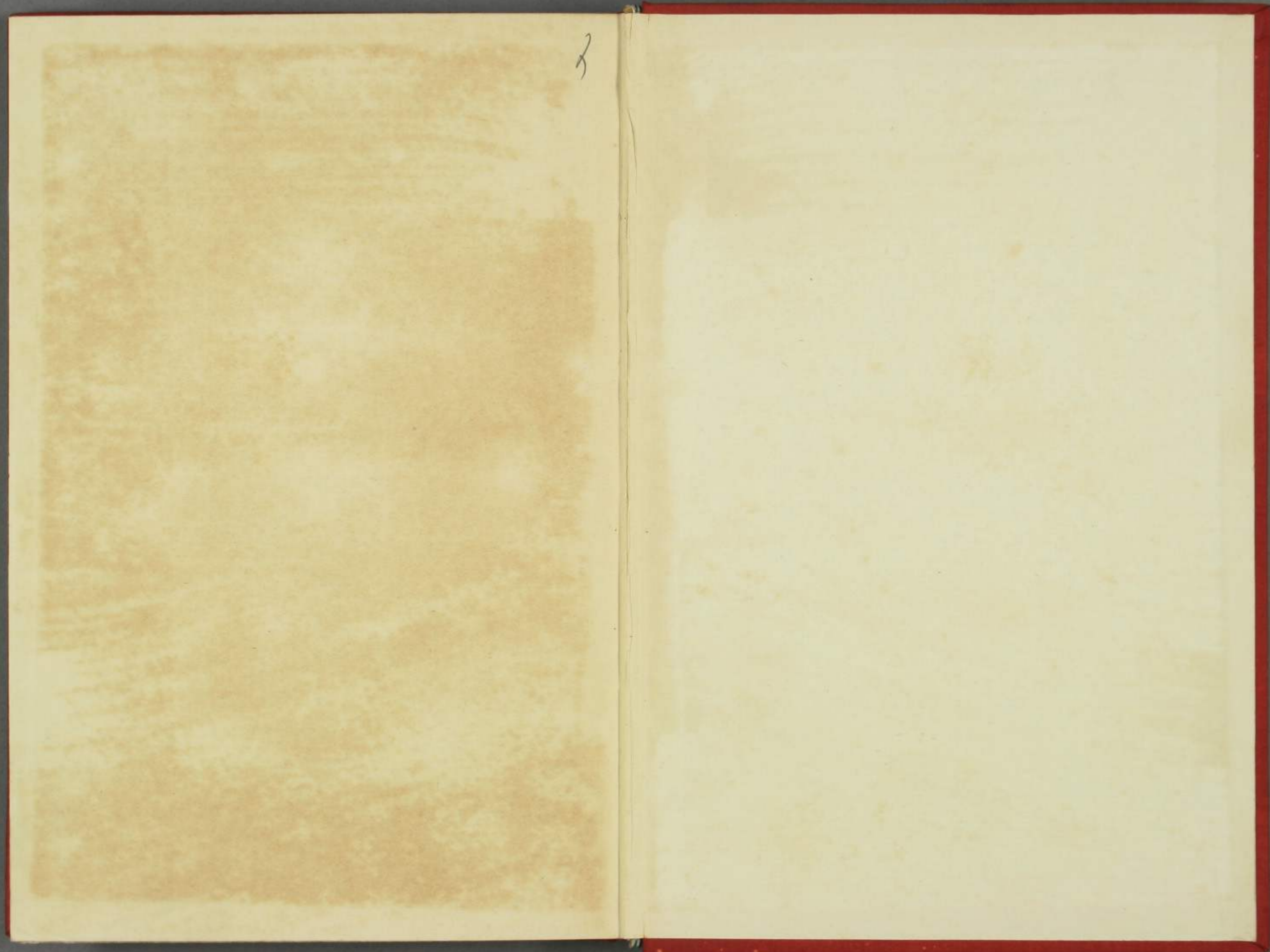


太陽と菩提

寺田清三







2

集 歌
薇 薔 と 陽 太

著 子 品 野 諾 與



TOKYO

A R S

1921

集 歌
薇 薔 と 陽 太

著 子 晶 野 謝 與



TOKYO

A R S

1921

自序

私は一九一九年に公にした「火の鳥」以後の新作の中から、五十首を選んで、この一冊を編みました。装幀は、親しい舊友の一人である山本鼎さんが引受けて下さいました。アルスの主人北原鐵雄さんの周到な美術的用意と相待つて、瀟洒とした美しい體裁の本に出来上つたことを嬉しく思ひます。

それから、三色版として一枚添へた菊の繪は、最近に描いた私の自由畫です。少しも得意とする所では無いのですが、北原さんの勧められるままに、私の子供らしさを記念するために挿みました。會て私が巴里の下宿で勝手な繪具いぢりを始めて居ると、子供よりも拙い私の自由畫を嗤はずに、却てそれを奨勵的に褒めて下さつたのは梅原龍三郎さんと山本鼎さんとでした。山本さんは歸朝以來、熱

心に子供の自由畫を主張して、教育界に於ける臨本模寫の宿弊を打破する機運を作られました。その山本さんの装幀に成る歌集の中に私の自由畫を挿むことも、私の無邪氣な行爲として許して頂くことが出来るであらうと思ひます。

一體に、私の生活の全部が自由畫の積りです。殊に前人の規矩に支配されない私の藝術が其れです。私は自分の個性を自由に表現したいために詩や歌を作ります。私は自分の個性の時々の感動に一つ一つ備はつた特殊の表情のあることを信じて居ます。出来るだけの感動を忠實に表現しようと思ひます、どうしても自由畫風の表現に歸して行く外は無からうと思ひます。

私の廿年ぢかい經驗から云へば、自由畫風の表現の方が、どれだけ作者自身の藝術的良心を満足させるか知れませんが、然るに、勞を厭ひ易きに就かうとする怯懦な本能が若々しい創造の本能を凌ぐ時

に、古人や他人の粉本を踏襲して、少しの創意と多くの模造との間に自己の存在を保たうとする保守的な藝術家を生じます。藝術を沈滞させるものは、昔からさう云ふ墮落した藝術家です。

私の歌は、私の詩と同じく自由製作です。古人の歌に似て居ないのは、私と云ふ人間と古人との相異です。従つて古人の歌の標準で私の歌を見て頂いては相違ない所が多からうと思ひます。

卅一音の歌としての外形は従來の短歌に似て居ます。似て居るのは唯だそれだけです。讀者は、何よりも先づ、私の個性がどんなに特異な感動を持つて生きて居るかを、私の歌から讀まうとなさつて下さい。唯だ感覺に就てだけでも何か他人とちがつた私の個性が現はれて居るとしたら、兎に角私の歌の存在の理由が成立つ譯です。

次に讀者に望む所は、その特異な感動がどれだけの價値を持つて居るか云ふことに就て、更に鑑別をなさつて下さい。トルストイ

は「眞の藝術品は人類の生命の流れに、新しい感じを注ぎ込むものでなければならぬ」と云ひ、カアベンタアも「偉大にして不朽なる藝術となるには、勿論新しい感じを表現しなければならぬ」と云ひました。私の作物がそんなに高度の藝術的価値を持つことは出来ないうにしても、私の理想とする所は、さう云ふ藝術へ一步でも二歩でも前進することにあるのですから、標準を従來の日本の歌に求めないで、世界共通の、現代の詩の標準で私の歌を批判して頂きたいと思ひます。

従來の歌から遠く離れた別種の歌が出来上つて居るのに、何時までも萬葉集や古今集を典型とする日本流の狭苦しい標準で取捨して頂いては迷惑を感じない譯に参りません。私は短歌をも詩をも作りますが、兩方ながら私の個性の表現として、同じ態度で作つて居ますから、其間に歌だから、詩だからと云つて批判の標準の區別を立

てようとは思ひません。今日の詩を読まれる人々が勿論従來の歌の標準などを眼中に置かれないやうに、私の歌を読まれる人々も、私の詩の一體として、世界の詩の標準を以て讀んで頂きたいと思ひます。若し私の歌が世界共通の標準に照して、少しでも一致する所があるか無いかでは非されるならば私の本懐です。

正直なところ、私達は世界を攝取して世界に生きて居る日本人です。日本のどの時代の古典からも影響を受けて居ると共に、世界からも複雑な感化を受けて居るのが只今の日本人です。私達は日本語に由つて歌を作ると云ふ一面から云へば人麻呂や和泉式部の遺業を繼いで居る者ですが、私達は奈良朝や平安朝の日本人で無いのですから、私達の藝術の尺度もまた世界的とならざるを得ません。日本人が作る以上、日本の地方色と民族色とを帯びるのは當然ですが、藝術の價值標準は、地方色と民族色とを容れながら而も其等以上の

ものであることを望みます。

と云ふと、私が自分の歌に就て可なり得意で居るやうに解釋されるかも知れませんが、私は久しく歌を作つて居ながらまだ自分の歌に満足する日が無く、断えず不足を感じて忸怩として居る人間で、自分はもう歌が詠めなくなつたと悲觀したり、歌と云ふものはどうして作るものであつたかと當惑したりすることが毎月幾回あるか知れません。内から自然に湧き上る熾烈な實感の嬉しさに折々出會ふ時でさへ、その表現に行詰つて、啞にひとしい苦痛の中に人知れず困り切つて居ることがあります。その難關を突破して、表現の自由を得た刹那に、詩人らしい自負の喜びを感じるにしても、次の刹那にはまた現在の不満を覺えて、自分の歌に對する未來の不安を抱かずに居られません。之が私の歌の何時までも素人の歌、子供の自由畫として動搖して居る實狀です。かう云ふ過程の中に、私の個性

がどれだけの成長を示しつつあるかに就ては、私の歌を透して、讀者の深切な批判を聞かせて頂きたいと思ひます。

ついでに豫告して置くことをお許し下さいまし。私は近い内に、自分の詩を選んで、「晶子詩集」と「晶子小曲集」との二卷を出すことに決めて居ます。私は歌で現はし得ない所のものを詩で現はさうと試みました。

一九二一年一月

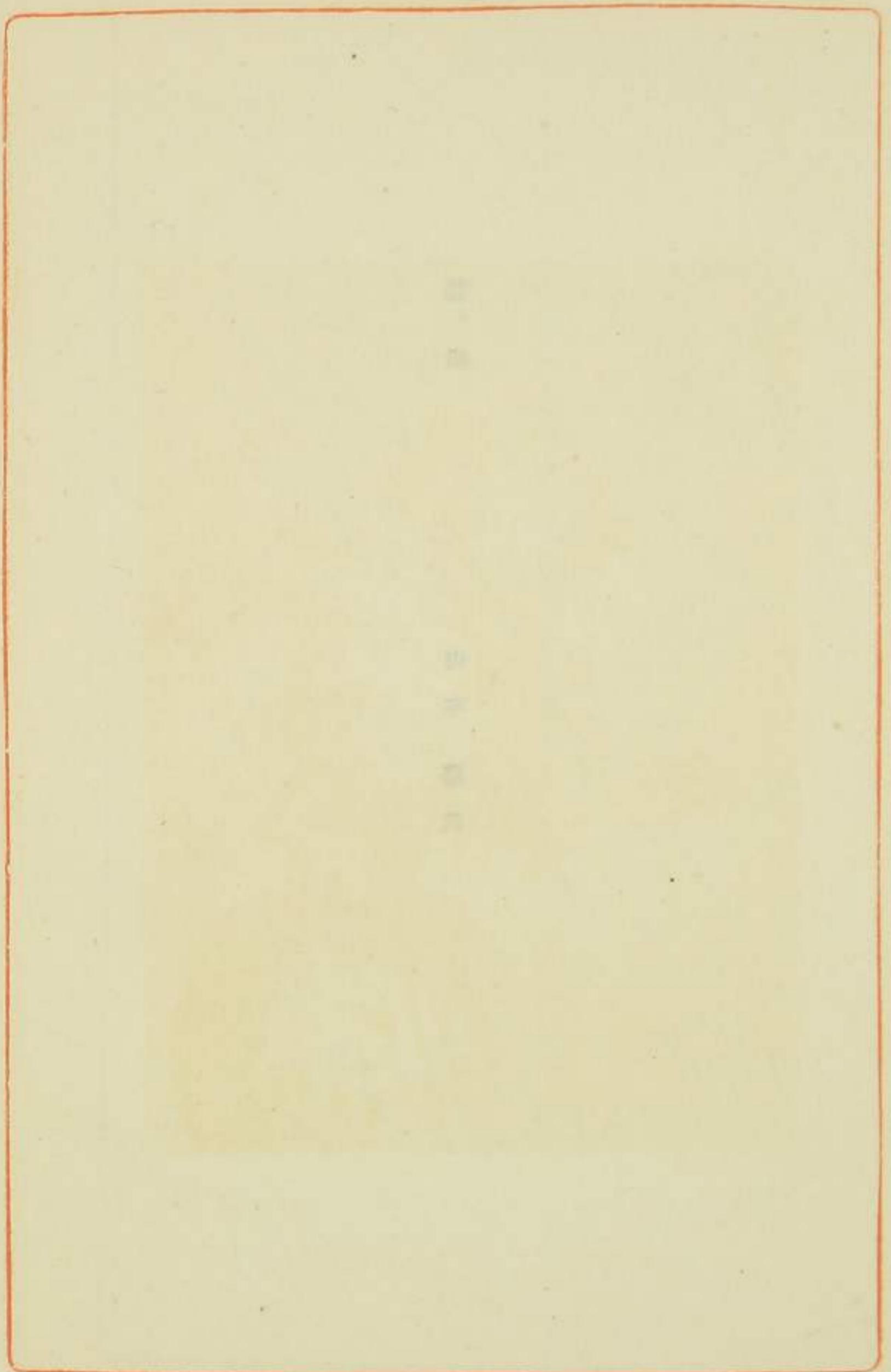
與謝野晶子

巴里にある平野萬里氏に捧ぐ

巴里にある平野萬里氏に捧ぐ
平野萬里氏は、日本の文壇に
多大の功績を著した。その
著作は、その思想の深さと
表現の豊かさに、読者の心
を捉へて置いた。彼の作品
は、日本の近代文学を代表
するものとして、海外にも
高く評価されている。彼の
文学は、日本の文化を世界
に紹介する重要な役割を
果たした。彼の功績は、我
々の心に永遠に刻み込まれ
ていく。

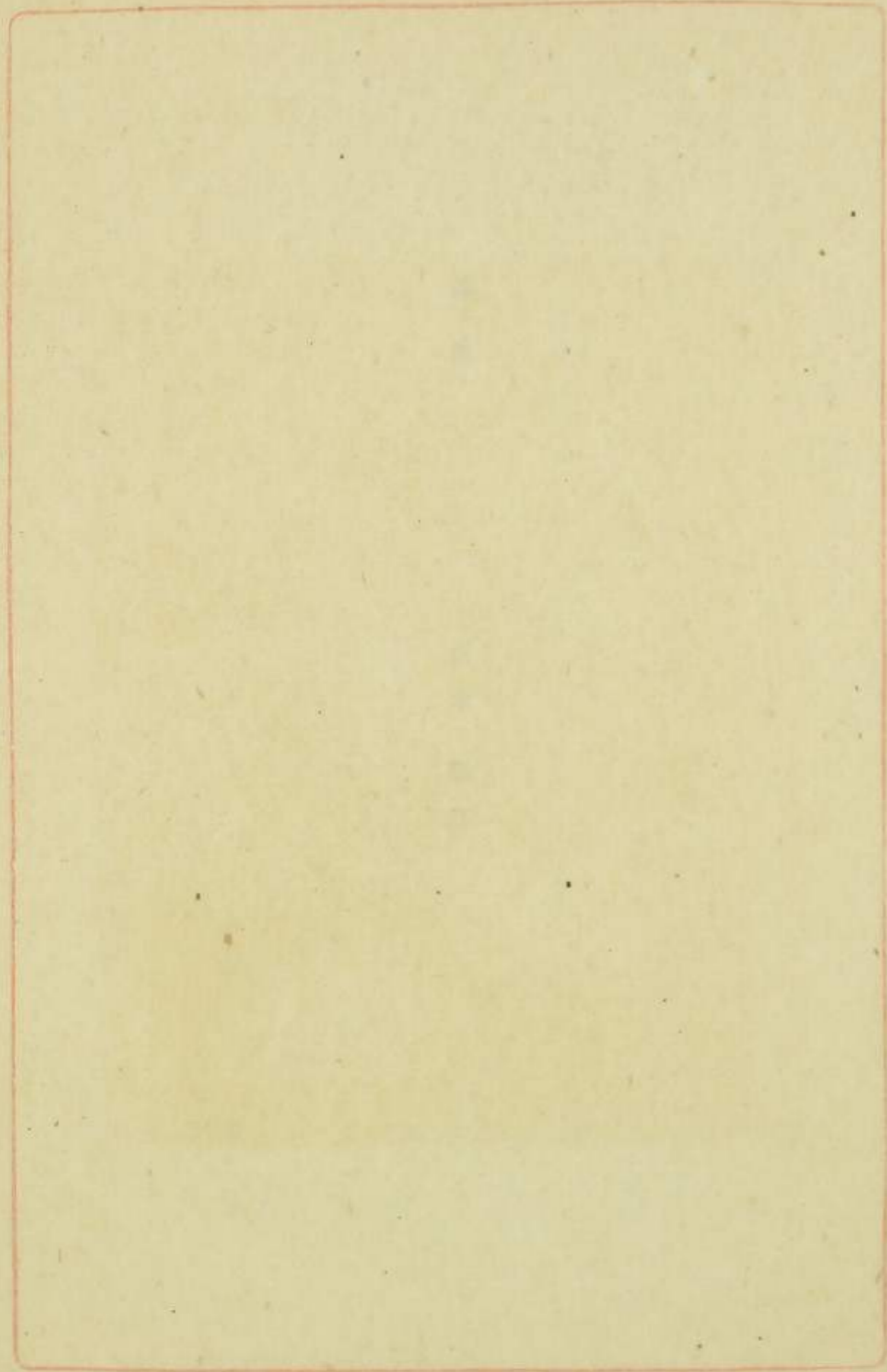
裝
頓

山
本
鼎
氏





著者筆



太陽と薔薇

凋落も春の盛りのあることも教へぬものの中
にあらし

爐^ろはをかし眞白き灰のかたはらに二つ寄せた
る唇も見ゆ

激しきに過ぐと思ふは涙のみ多く流るる自らのこと

音立てて石の山にも降れよかし下の襟のみ濡らす雨かな

白らの寄邊なきこと太陽に似ると数けば人咎

めけり

高力士候ふやとも目を上げて云ひ出でぬべき

薔薇の花かな

旅にして沈香亭の欄干にあらざるものへ寄れ

ば寒かり

重ぐるし春ことごとくわが上に残りとどまる

心地こそすれ

熱き息わづかに中を通ふべき若葉の森となり

にけるかな

こころにも柏かしはの枝のひろがると夏をよろこぶ

一人となりぬ

夏の空梅蘭芳イランフワンの顔見ゆと月の上れば人のささ

めく

われの見て淋しとするはかきつばた菖蒲がほ

どの藍の一はし

ソロモンの古き榮華に勝るもの野の百合のみ

と思はぬもわれ

雛罌粟も身を逆しまになすはては萱の草より

淋しからまし

たそがれの机の下したに螢居ぬ旅を終りし三日み四よ
日のひのち

金蓮花そよ風吹けば砂山の紅蟹のごと逃げま

どふかな

春の日の花の色して心をばとりまくものも少

しうとまし

かぶる髪振分髪しの四五人ごの子を伴ひて春かぜ

通る

わが心曇りぬ青かくれなるか何れの塵の立ち

舞へるらん

君とわれ空と水との際きはよりも匂ひやかなる一は

線いとを置く

あぢきなし遠きも昔近き日の忘れがたきこ

ともいにしへ

わが木立葉の黒すみて淋しけれいつ華やかに

秋風吹かん

さかしげに君が文をばおさへたり柏かしはの葉より

青きたろ蠶らう螂

美しくきわれをば覗く天地の片はしとして先

づ見しは君

戀人のありなしそれを明あ暗かの二つの世とは思

はれぬかな

幻と云ふかたはらに無きものの名をわれも書

く彼の人も書く

桑の木の濡れかたぶきて息づきぬ帯の重くば
解きて寝よかし

目の前に淡雪ちりぬ何ごとも云はで死ぬると

云ふ形して

龍騎^{りゅうき}兵王を護れる槍よりもめでたく見ゆる寸

の針かな

森深くなりたる道に桃白く散るなり鶴^{つる}の涙の

ごとく

御言葉^{みことば}をよしと聞くのみ人に似ぬ淋しき色の
花心^{はなごころ}かな

露立ては浴槽^{ゆたか}の底に桃李^{とうり}咲く園のありとも思

ひけるかな
(以下二十二首人々と箱根に遊びて)

紫の傘して山を見にいであぬ旅より戀にこころ
行く人

山に来てわれもめでたく湧き出づる泉の如き
戀もこそすれ

戀の塵つもりゆくなる人の子が泉を浴びに入
りし山かな

籍根路の湯阪の山に見出でたり白裳曳きたる

春の佐保姫

夜となればわがかたはらへ寄りきたり山水が

云ふいにしへのこと

浴室に山のしづくの音聞けど思ふはわれの清
らなること

何れにもひたさまほしきおのれかな温泉おんせんの中なか

冷泉れいせんの中

自らの戀より青き淵の水見んと山行く春の旅

びと

山に來ぬこれより後のわが心藍がちにしもな

らんとすらん

やや遠く明星が岳かたはらへものよく語る七

人を置く

る浴室

生きながらわが黒髪を猿澤の池の玉藻とめづ

下

溪川は雨に濁らずくれ竹の青き色しぬ百尺の

箱根路の明神山あきかみやまに點る灯を忘れぬ人となりぬ
べきかな

太閤の石風呂よりもよしとしぬ吉井勇が浴泉
のあと

日の暮の明星岳みせつがけの山風やまかぜに少し萎れし戀ごころ

かな

彫刻師凡骨をかし湯の宿に人をまねびてうた

たねぞする

白き霽やますも溪を上りきぬ泉の水にならふ

なるらん

白鷺の瀧を見んなど戀をする片ごころには思

ふ人かな

雨降りて山の消ゆるに驚かず不思議を多くつ
くる若人

燃ゆらんと恐るるものは心なりかひなし身を
ば泉にぞ置く

涙おつ箱根の谷を上る靄またためらはずなす
にまどはず
(以上)

涙をば受けんと思ふさましたりいとあさまし
や水晶の盆

美しくしき人を泉に見し日よりナルシスと呼ぶ

水色の壺

屋根の草わたを散らすは高き木の知らぬはか

なき喜びにして

友と居てやや口重くなる時のわれ自らをなつ

かしむかな

おのれをば少し怪しく思ふ日の甘き味ひ人に

知らるな

太陽の一日をもて終るべき花とも見えぬ紅蜀

葵かな

二三本^{すき}薄なびけば目に見えぬ支那の芝居の沛

公の馬

紫苑咲くわが心より上りたる煙の如きうすい
ろをして

並木ども足爪^{つま}立てて人を見る十月の夜の街を
われ行く

狂ほしく髪を亂して靡かせて煙草の泣ける青
 き皿かな

なよやかに引きいでられぬ悲みのこの白き綾
 この青き綾

薔薇ならずいと華やける西海の入日の色に今
 似たるべし

過去の世は海より深し白玉も珊瑚もさぐりい
 でがたきかな

自らは虚無より流れ来りけれものを忘れん掟
のもとに

一瞬に八千載のよろこびを知るちからのみ滅
びざるかな

黄金の箔を胡蝶の押しにきぬ盛りの春の丹朱
の上に

戀をする心は獅子の猛なるも極樂鳥のめでた
きも飼ふ

人としておのれを置けるこの世をば悲しきば
 かり愛づるなりけり

何ごとも假かりのごとしと微笑みぬ二なく執とする
 ものも見ながら

形かたちよき維摩居士かな思ふこと我等に似ざる像
 と云へども

人ききて身に沁むと云ふこと言ひぬものは
 づみはなべてわりなし

何ごとも改めがたし百合ひらき罌粟のにほへ
ば見まほしき君

明日といふよき日を人は夢に見よ今日のあた

ひはわれのみぞ知る

うら淋しやがておのれの心さへ青蓬生あをよもぎとなり

にけるかな

假初かりはつとなさず大事の如くせず魂捨たましひてんことを

くはだつ

若き日は安けなきこそをかしけれ銀河のもと
 に夜を明すなど

大空の秋の銀河の水の音すなり眞珠をもてあ

そぶ時

日を待たず若葉の榛の山なれば曙つくる山は

みづから (以下四十首伊香保にて)

伊香保山湯の流よりかんばしく甘く苦しくほ

ととぎす啼

都をば憐むごとくなつかしむ如く息つく山に

來りて山影の影よりみれば山は甘く苦くも

雲よりも淡き色する榛の木ハシの若葉の山に君と

來しかなを昔葉の影の山は影に別くくる山は

いかづちの生るる熱き湯の音をかたへにした

る朝のくる髪カミも山の影をまて見れば影をさき

われはこれ戀をなす日のよろこびにつづくい

みじき浴泉の人ヒトも白泉の影をさき

驕れども今日はわづかに白鳥とおのれを見な
す浴泉の人

人間の心に遠き山の石あまたし見ればあぢき
なきかな

旅人の夜話よばなしなども止むころの廊下になびく温

泉の霏

おのれをば全くするはかたしとて美しくしさの
みめでぬ泉に

白鳥にまなふ驕りもはかなしと泉を捨てて今

日は山行くまゝのさるるは光りもつ美くも

枝となく幹ともあらずさあをなる落葉松の初

夏の山 青嶺まよふまよふささの瀬にけふの

雪かづく穂高の山と湖と葡萄茶の繻子のいた

どりの芽と養ふ思ふまゝさうさき露の味は

なつかしくわが山駕籠の左より右にひろがる

くる髪山の山にまはれば髪も想ひも精はす

鈍色の冬につつまれわが髪も愁ひも解かず

梅の山

山吹を遊ぶ螢と思ふまでをぐらき谿の木下路

かな

をちかたの七重の峰と對ひ咲く榛名の山の山

吹の花

娘にて藏の板敷踏みたるにまさり冷たきおく

山のみち

榛名川みどりの絹のふくろより轉まびいでくる

白玉しらたまを愛あいづ 対たい遊ゆう韻りん本ほん式しきささつつままちちりり命いのち式しきままはは

百尺の高きところにわが見るは白き猛火の夏

の山やま川がはハハのナナ重じゆうの糸いととと鎌かま石いし知ちくく瀬せ谷やの山やまの山

一もとの深山櫻のめでたさに七瀬とよむと思

ふ溪かな

岩を打つ水のめでたき若さをば見て石を投ぐ

山の男は

唯あるは千年の巖杉木立榛名の神のみやしる
 の路

われもまた岩屋の奥に丹を塗りて住める榛名の
 神にならはん

しらじらと岩より下り飛び立ちぬ翅をもてる

山川の水

船の人歌をうたへばいと寒き夢かとおもふ湖

畔亭かな

年してくる髪のごと美しくしき洞にちるなり山

ざくら花

伊香保風岩にあるよりゆらゆらと山吹靡く鶯

籠の上かな

伊香保風少し烈しき野平を高き杖して君人と

行く

駕籠やりぬ伊香保の奥の八峰臺はるかに野火

の立つを後方に

野^の焼^の火^の心^につく^を思^はす^ば人^に涙^の流^れさ^らま^し

か^ずか^ずの^愁を^洗ふ^泉無^し伊^香保^の山^の岩^を

覗^けど

浅^みど^り榛^の若^葉の^つく^りた^る真^洞の^奥の^熱

き^噴泉

こ^の山^の泉^にあ^りと^朝ま^だき^われ^を見^知れ^る

風^の驚^く

清らにも梅なほ咲きて伊香保路の皐月の朝に
うぐひすぞ啼く

浅みどり風にも散らんほのかなるはかなきい
ろの榛の一むら

身みの中の緑のこころ歸り入る榛の林と思ひけ
るかな

庵と見よ魚とも見よとおほどかに人の思へる

朝の浴室

火にあらず眞白き玉たまの質しつなりとわれを思へり

山の泉に

物思ふ身にあらねども山の湯の靄あせに青くもつ

つまれぬわれ (以上)

心から身も世もあらず散りがたの淋しく見ゆ

る夏の花かな

踊らんとするも散るをば思へるも皆わが胸の

ひなげしの花

淋しきは淋しきままに心鳴る皐月の朝となり
にけるかな

水泡みづうをば姿としたる人間のいのちの中の一瞬
の戀

目閉づれば梅蘭芳の幻の見ゆるおのれもめで
たかりけれ

眺めやる沖の小島のこちすれ群ぐんすすきまだ
若やかにして

うすものを晝の間は着るごとし女めきたる初

秋の雨

あなかしこ大世界をば秋風は二つに分つ空と

われとに

はらはらと花びらのごと汗ちると暑き夏さへ

憎からぬかな

聖書にて智慧の木の實と讀みたりし木の實食くら

ひて智慧を失ふ

灯を置けば黄なる魚寄り遊ぶなり君と覗ける

加茂の流に

軽き波重たき波のこもごもに來て打つ戀の海

に身を置く

山上さんじやうの高きところの湖の氷ると告げぬわれの

このごろ

去年こぞ見しは白き日輪この朝の東天にある紅き

太陽

地の上のこと改り人は皆創造の世の神ならぬ

無し

人人のめでたきは皆手を舉げて招きの春のめ

ぐり來しかな

地の上の平和の花の大きさを日のめでたさに

似たるものかな

人多く名のみ知るなりわれは見ん新しき日を

たなぞこに置き

戦せず正しきものにかへりたる春と思へは相
もことほぐ

春の人十六億の白鳩の舞ふにたとへんまた戦

せず

春の雲空になびけばめざましき世界にありと
われも喜ぶ

ひがし山青蓮院のあたりよりも色の日の歩
みくるかな

南天は雨もみぞれもしみ入らぬ朱しよのこちたさを
歎くみづから

爐の前にわが座をえらぶおのづから人を戀す
る人のならはし

くづれたる椿は同じはらかならあまたと猶も
寄り添ひて寝る

庭の内此こ方かた彼あ方の木の下もとに祿ろくの衣いほどかさな
る椿

雀子すまごが網笠被かたる早春さうしゆんの牡丹をのぞくこき足

おと

いとこき筍たけのこめきし塔にあるあ閻浮檀えんぶたん金のきん福壽草

かな

わが心五彩の色のほの浮きぬ春のものともな
りにけらしな

美しくおのれのままに生ひ出でし野馬やばの聲

する初春のかぜ

初春は男も清し松と云ふ
 ちたき枝もにほやかに見ゆ

速かに元日暮るる趣きも朝より見えてをかし
 かりけれ

猿の来て踊る頃より元日の心やうやくもの足
 らぬかな

初日影弓ひく人の姿する二尺の梅にものを云
 ひ懸く

孔雀の尾ひろがる如くあてやかに春の初めと
なりにけるかな

春の來しよろこびすなり今朝起きて君をわが
見るならひの外に

元日のたそがれ悲し大空に冬のこころの歸り
くるかな

善と悪いまだ二つに分れざる世もかへすやと
思ふ春かぜ

丹後にておさんを見たる萬歳の奴がわびし門

覗きゆく

熊野より熊の牙など送られて子に語ること盡

きぬ正月

元日は港の宿の明方に似てももの音を珍しと

聞く

元日や伊勢の宮居の思はるる白き箸とも君に

云ふかな

上もなき幸人さいひひびとにあらずして物思ひつつ春をよ
ろこぶ

わが子等が小姓のやうに袴して板の廊下を通

ふ初春

櫺の葉の魚のさまして這ひよるも淋しき園と
なりにけるかな

新しき春の初めをよろこびぬ冬籠ふゆこもりなるかたち
のままに

水仙の次々つぎつぎ開き新しきけぢめつくるがあぢき
なきかな

地の上に流るる時を知らぬものあらじと歎く

草の青めば

常磐木の冬に立つなる淋しさを覺ゆる人と知
られずもがな

大きなる銀杏ぎんぎょう金かねして地の上のものおごそかに
思はるる頃

早春はるしげんの銀の屏風に新しき歌書くさまの梅の花

かな

黄金を育王山に送るより更にはかなきたのみ

なるかな

山の土踏めば昔の戀しけれ花たちばなのた々

ひならまし

あぢきなしわが足音をわれ聞きて歩む淋しき

路みちに異ちがはず

白き罌粟浄土の端はたに置かれたる花もとすれば

風にゆらめく

爐いろりの火燃ゆフランチェスカのこの中なかにありと

も見えて美しくしきかな

なつかしき春の雪かな白玉の環わをつまさぐる

心地こそすれ

自らを春の姉とも思ひなし靜かに人を戀ふる

このごろ

水色のうすもの着たる夕風と並びて語る木蓮
の花

暮れてなほ淡き霽金の日の匂ひ漂ふさまの身
は淋しけれ

悲しくも亂れ散るなり檢非違使の夢を見たる
や山ざくら花

櫻より生れ出でたる人ならん夕は愁ひ朝はは
なやく

船の笛鳴ればひび誰ひなも旅と云ふ悲しきものを思ひ

おはせり

めでたくもふたごころ二心なき誰を置くおとこ小き人と親おや々の

ため

灯を置けど物をも云はず歌へども鼓も打たず

誰のえをとこ

白びやくらん蘭の蕾のやうにあてやかに誰の袴はふくら

めるかな

くれなるの尾をば櫻にかけたるは山鳥やまどりに似る

春はるの落おち日ひ

戀のごと重ぐるしとて南蠻の紅き更紗をにく

みけるかな

わが胸の焰が立つる樓臺ろうだいも煙の描く塔もはか

なし

うち黙もくし涙ぐみたる山ありぬ彌生の春の落つ

る日のもと

末の子が熊の子となり走りこし夢を覺まして
 鶯ぞ啼く

岩山の青にまじれるつはの花さばかりと見ゆ

秋の日の色

大きなる桐すずかけを初めとし木の葉溜りぬ

海の幸ほど

自らが幸ひ君がさいはひのつゆも變らぬもの
 にてあれかし

おのれかと旅の心地の哀れなり黄なる一木ひときの
濡れて立ちたる

濱に出で踏めばほのかに砂の云ふ戀人のごと

君に順ふ

筑紫路や野は少女子のものならし日傘並ぶる

櫛木はじこ立たかな

櫛はじの枝白き珊瑚に來て遊ぶ魚かとばかり葉の

残るかな

半身を魚になしたる繪ほど見ゆ遊びを好む我
等思へば

戀と云ふ釉薬を透きて現れぬ描かれたりしお
のれの模様

光悦が金を篋りたる城と見ゆ銀杏めでたき熊
本の城

溪の湯の眞白き湯氣に来て混る空のかたはし
山のかたはし

いかづちも阿蘇の神馬も降り立ちてすすると

思ふ夜の溪川

しろがねを芒も延べぬ千年の頂の火にまがへ

んとして

阿蘇の阪母の後より行く子馬を見て俄かにも

家の戀しき

初冬か秋か知らねどおほらかに阿蘇の煙をい

だく空かな

旅人のおのれやつれぬ白玉しらたまの湧く泉には浴び
じとぞ思ふ

大阿蘇おほあその山のちからを語るごとわが傍かたはらにおち
て

櫛かみの枝眉えだまゆほど葉をば残こなり筑後ちくごの川の浅葱あさぎ
の上に

湯の街の霧きりににじめる灯のあかり一つかこむ人かと
夜よのかしけれ

豊國の砂湯の底にみづからを鴿の雛ぞと思へ
 るは誰れ

君と見る鳩の羽色の山のあめお納戸いろの湯
 の街の雨

夕ぐれの潮に引かれて大海へ消え入るとき
 四極山かな

十坪ほど都の如く清らなり宿屋の庭の黄なる
 灯のもと

旅寝する人のささやき雨の聲うしほの響噴泉
のおと

しづくする好文亭の萩の花清香閣の秋かぜの

おと

那加川の海に入るなるいやはての海門橋の白
き夕ぐれ

大海の波もとどろと来て鳴らす海門橋の橋ば
しらかな

な
の
り
そ
を
波
の
中
よ
り
拾
ふ
な
り
身
に
か
り
は
り
の
あ
る
も
の
の
ご
と

白波なまの布ぬにすがりて荒磯あらいその秋あきの初はつめの月つきのぼ

りりききぬぬ

日ひのくくれれに安中あなかつきたり磯節いそぶしを語り初はつむれば砂すな
に露つゆおおく

日ひの昇あり魔性まじやうの岩いわも砂山すなやまの踊おどのあともあらは
になりぬ

安中あちゆうの磯節いそぶしよりも淋しけれ磯いその名所なむところの長き石

段

君きみが幸さいわいわがさひはひの止まるやまのく各ものを恨み

あへるや

徒らにもむだの書きちらすことすなり戀醒こいさめめなら

ぬ戀こいの休みに

二月ふたつきの日昇ひのぼるころに庇かきしより煉瓦れんがの塀へいに身を投

ぐる雪

落椿鳥より小き身を持ってど戀知りがほに水の

上行く

春の靄少し靡きて去りたれば物を思へり池も

木立も

水仙は萎れし後も明星に似たる葎しをば唯中に

おく

香を放ち歎きしあとを白く散る梅の花をば哀

れとぞ思ふ

雨ひと日春のこころを誰よりも知り給へりと

阿ありて降る

よこしまに心を引くと見たりしも昨日になれ

ば夢に似るかな

君と在るくれなる丸の甲板も須磨も明石も薄

雪ぞ降る

ことごとく鏡のありて寫すともうつらぬ程の

小き悪あく心こころ

たまさかに大^{おほ}天^{あま}地^{つち}の瑠璃の壺蓋あけしかと白
き月かな

わが心つと缺けやすく満ちやすしはかなかり

けれ嬉しかりけれ

枝にただ七八つばかり花置きて何を思へる梅
の大^{おほ}木^きぞ

鶯はみそらの日より来て鳴きぬ淡^{あざ}黄^きのいろの

あけぼのの庭

朝あしたより人の戀しくわが心春の氷をむらさきに

這ふ

朝あしたより二月の春のくれなるの太陽の子のうぐ

ひすぞ啼く

手上ぐれば蘆邊の波のあざやかに眞白く寄る
と見ゆる踊子

少女たち田た蓑あまの島に禊あはして人わするとも舞を
忘るゑ

大つづみ小鼓太鼓鉦も皆春の御娘いでこよと

打つ

立唄の君に引かれて踊るなり下を行くなる加

茂の流も

戀をする人の中よりおのれをばけづらんとし

て旅に出でけん

船の笛鳴りぬ港の敷石の白き路みな濡れよと

ばかり

わが知らぬ船の煙の迷ひ來ぬ港の宿は朝の戀

しき

朝も夜も疾く歸らんと羽うちぬ旅の心に來て

棲める鳥

青やかに誇らしき山ほこらしき海に向へり誇

らしき人

都にて隠れて泣くを旅に來て山河にかこち友

と歎かふ

くれなるの醜^{みにく}の花の物語二人の君に聽かん

とぞ思ふ
(琉球なる山城正忠氏の結婚をよるこびて)

そよ風と云ふ稚兒のむれ階上に下の廊下に小

草に遊ぶ

浅みどり柳の枝は島を巻くわれは君をば紫に

巻く

春はよし鏡の裏の心地する晝の月のみ見ゆる

小窓も

あけぼのはうす紫にひるは紅夕はしろき山さ

くら花

物ねたみ物うたがひの心などつゆも知らさる

春の鶯

繋つながれし花か女王の紅玉こうぎよくか歌劇かげくの子等のよく

歌ふ口

海の色信濃の國の高原たかねに摘みて賜ひし草に似

よかし

(勿忘草を贈りこし人の海外に行くを送りて)

水の泡消ゆるごとくに一本の淋しき枝のさく
らちるかな

梢よりさくら散り來ぬ君とわれ物思ひつつ門
出づること

戀人を夢に見るをば教へたるその力をば何と
こたへん

心をば威のあるものと内に見る日のみあれか
しあはれおのれに

そよ風は心に足らずくる髪に收めてぞ行く戀
の思ひを

或時は火と火の並び水と水並べる人が二人す
ること

火の山もおさへ波をも鎮むべし戀しきことを
いかがすべきぞ

貧しさのきはまりなきと服したる不死の薬は
別様のこと

春の花捨てて見ぬごとうち籠り君も思はずわ
れも思はず

春の月とらふ巴の紋を水に置く二十日ばかりの曉に

して

初夏の日より金砂のこぼれきぬ人を思へる心
の上に

水色と銀ぎん絲し織りたる錦をばまとひて出づる初

夏の月

太陽も稀に疲れて曇るなり淋しきことを知ら

ぬわれかは

同じこと今日も思へば屋根の草見るかひもな

き綿を散らしぬ

わが大蛇八つの頭を伏せに伏せ酔ひ痴れて居

ぬ何とし給ふ

笛吹きて人の一人をうちめぐる戯れごとの心

地す戀も

隠るべき地の隅も無きことにより日も大空へ

逃れたりけん

紫のヒヤシンス泣くくれなるのヒヤシンス泣

く二人並びて

白き花ゆくへも知らずそよ風に身をや更へけ

ん雨となりけん

(水落露石氏を悼みて)

三日の月湯殿の口にほのかなり春の終りの花

のこことに

紅椿石垣のごと重りて咲くなるもとのちさき

菜園

火の鳥にうち護らるる王かとて今日も二人の

ことのみを云ふ

二夜三衣糠を塗られてある月の甘き匂ひをな

つかしむかな

幻術師二人向ひてある時は春秋も無し天地も

無し

淋しさを見知れど身にも來るべき冬とは更に
思はれぬかな

やるせなし胸せまるなど云はまほし夏の初め
はわりなかりけれ

いちはやく阜月の風と薔薇の花女ごころを酔
はしむるかな

引きすぐれめでたきものを二つ三つ數へて心
寂しくなりぬ

朱あかとなり白しろの限りと一ひといろに物混へざる佗たし

き心

思ふこと行ひがたしこの歎きわれさへすれど

人怪ひとあやます

大海おほうみの波の間を泳ぐ魚いさな斯くと心の見えてめで

たし

よき車あまた通ひぬ初夏のころの上の敷石

の路

うちつけに生きがひのあること云へと来てそ

そのかす初夏の風

夏の風弱げに白き蛾の一つ美しくむとて往き

戻りする

戀人とおのれと花と分ちえぬこれもわりなき

中のひなけし

人の子は涙を流し朴の花戀することに飽きて

香を立つ

柏しほの葉青くひろごり朴の花甘き匂ひす鳥にな
らまし

わがこころ病をすらし朝に次ぎことわりなく
も夜半やはの來る

うづだかき銀杏踏みつつ目あぐれば増上寺見
ゆ寒き路かな

夕にはことの蕾と踏るなり花菱草はなびしきになるよし
もがな

撫子は梅蘭芳の酔へる顔高力士をばちやうと

打つ顔

火となりてわれに近づく心かとすういとびい

を思ひけるかな

夕立は山國川の岸の田の緑の縹子をもてはや

し降る

露草は涙先立つ話をばする萱の葉のかたはら

に咲く

わが如く静かに居よと睡蓮を水へ置きけん夢
の中にて

雨の日にいぬころ草のささへたるちひさく白き朝

顔の花

静かにも君を思へる心をば奥に置きつつ思ひ

亂れぬ

心いと動きやすけれ君がこと我がこと兼けて

この歎きする

心より早くはしこく動くなどわが扇をば思ふ
ものかな

白き紐長し淋しきころより續くと見えて哀
れなりけり

若き月翹たかふるはせて栴檀の梢にありぬ樓にの
ぼれば

よそめには盛んなること太陽をしのぐと知ら
ぬ向日葵の花

かぐはしき彌生歸ると云ふことに心のをどる

微風ほろかぜとわれ

夏雲なつぐもの崩れておちし白の罌粟日のかたはしの

くれなるの罌粟

薄絹うすきぬの裳裾を引けばみづからも雲のこちす

秋の夕ぐれ

わが博士遠き國にて相知りき長きわかれをこ

の國にする (以下六首和田垣博士の逝去を悲みて)

おん目あけこのまがごとを常にする猿樂ごと
と君よ云へかし

御聲みこゑより靴の音まで蓄へて耳はこころを悲し
くぞする

君と見しツウルの街の敷石に傳ふこちす今

日の涙は

海遠く行きつと思ふ病院の白き小床こまどを船とも

おもひ

ああこの日さと涙降りさと日射す君の無しと
て空もまどへり (以上)

夕立に濡れてはためく簾などすでに淋しき日
となりしかな

子を思ふ今日の心も消えつくす大難とのみ死
の思はれぬ

秋風の打解けぬごと吹くものか街の女も淋し
きものを

あかつきの萌葱もえぎの蚊帳むしずかにあえかにも玉蟲たまむしのご
と寝てある少女

花草に法のこころの風吹くと露うち散るを喜

びぬわれ

ひぐらしの聲の残るを岩山の夜のしづくと思

ひけるかな

夕立の雨に混りて見ゆるなり翡翠ひすいの色のおほ

とりの羽

こほろぎの聲に逢ふなど珍しく夜の思はれて
わが涙おつ

あわつけくおのれともなく地に落ちし風を見
るかな花草の中

あてやかに朽木の洞を出づるなり黒漆の蟲朱
の甲の蟲

菊の花蓬にまじり匂ふなり旅人ならば悲しか
らまし

悲しくも若さの盡きし身ぞと云ふ今中天ちゅうてんに太

陽は居て

うら淋し花を浮けたる水と見ゆ前にしたるは

鏡なれども

自らの青き愁うれひにいつしかと秋のつなぎししろ

がねの絲

一人居てほと息つきぬ神曲の地獄の巻にわれ

を見出です

われとわが盛りの時を過ぐること何ばかりと
もいかで見知らん

柿かきさくら童わらわめきても走り寄る落葉おちばの庭の楯形たもとがた
の石

秋の水穂あき薄うすほどのかすかなる銀を引くなり山

莊の門 (以下八首葛師の十橋莊にて)

鶏頭は憤怒の玉に似たれども池にうつして自
らを愛づ

鶏頭のなかに居て見ぬ秋風に涙をこぼす赤き

太陽

大空の青きとばりによりそひて人を思へるこ

すもすの花

おもけにも篝火のしづく夕月の光の中におつ

る山莊

物云ひてわれの立てるは小板橋君が立てるは

弓形の橋

吊橋つりばしに月を見る夜はをかしけれ波のうねりに
乗る魚のごと

秋風の吹けばわが身もあはれなり十橋莊のつ

り橋の上 (以上)

人の子は白波しるなみあぐる海よりも樂むことの少か
りけれ

新しき愁かあるは漸くに今知る戀のよろこび

か是れ

秋の日を涙ぐみたる白き瓶ほしびん微笑ほほえみつくる藍いろ
の瓶

相寄りて地上に知らぬ光をばつくるえをとこ

花の少女子 (竹友藻風氏の新婚のよろこびに)

物思ふ人の境界さかいを描かんとす白く冷たき初秋

の水 (以下十一首茅ヶ崎にて)

まばらなる磯草ながら眺むれば心のうごくさ

まもするかな

華やかに綺ある魚を手にもちて秋の磯より走

せくる童わらわ

しろがねの浪を捲かんとこちよく網を投ぐ

なり朝の男は

海見れば遠き方よりはかなさもかひあること
も傳はりぞくる

寒き風きよき光の通ふとて窓をかなしむ階上
の客きやく

長き窓わが心にもこの一つありて冷たき風の
かよふや

窓々を秋の愁ひのな入りそと閉ぢつることも
書ける消息

雲なども来てなびくかと廣やかに高く淋しく

見ゆる家かな

高やかに風見車は立てれども戀はいづくを向
くと教へず

とりつれば高くも波の音添ひぬ悲しき枕備へ

たるかな (以上)

うら悲し衣桁の衣をわがあらぬ日に人の見る

ごとくす病めば

わが愁ひ土ぼこりをば姿とす胡蝶も花もまじ

へたれども

野の中の沼の續きに横はるところの如し蔑す

べしわれ

ならばしの驕慢ケレ懈怠ケレ怠ケレまれにするわがへりくだ
 り皆人ほめぬ

すべいんが歌うたふ時いたりやが窓よりくれ

し肉桂の水

秋來ればおのれに歸るはかなくも眞白くもろ

きおのれに歸る

若やかに反身セウミをしたる女郎花その前を飛ぶ青

き蟠螂タナトウ

おのが身も秋の御空も澄み通り銀河流るる涙

流るる

初秋の雨の踊子美しくしや桔梗描きたる燈籠の

もと

秋立ちぬ街の廣場に背を反すかのセントオル

冷たからまし

簞蟲を柴刈をする蟲かとてあさましがりしわ

が少女の日

青蛙なぐ雙なぐヶ岡の法師とも呼ばれんさます石にも

たれて

夢のすぢわれことごとく君にさへ告げも得ぬ

かな人間は憂し

夕雲をかざす海かな高やかに手には胡弓を弾

き鳴らしつつ

賤しとも賤しあき貴あきなさ限りなしわがもて悩むこ

の二ごころ

むらさきの煙も上るこちする蟬の聲かな夏

木立かな

唯一目駝鳥の羽の扇をば見せて車の走せ入り

し森

食卓にメロンの上る日となればこころに沁み

ぬ森の夕風

月夜よし海馬の像のかたはらのテラスに合は

すさかづきの音

八月やセエヌの河岸がしの花市はないちの上うへひややかに朝

風ぞ吹く

秋近きリユクサンプルの木下きもと風かぜ一人行く日は

はかなげに吹く

あな哀れ人の數よりおとされんことを大事と

われも思へる

悪龍の醜みにくきを打つわれを打つはかなけれども

本心の打つ

はかなしと馬追蟲をおひ放ち子は籠に飼ふ鐵

色の蟬

悲しき日乾隆帝の顔などと白紙に墨を引きて

笑へる

わが肩に柳の觸れておもふかな梅蘭芳の玉の

かんざし

童たち蘆の葉分けて水出でぬもも色の雲湧き

いづるごと

鬱金の帆張りてめでたしわれに來や天に歸る
 や九つの船

夷隅川波いと青く靜かなり雲の中かと船にお
 もへる

旅路より都に入れば龍宮の魚くづのごと人の
 うつくし

秋の日のダリヤと云へる繼娘ヨハネの首をも
 とむる娘

あなわりなわが來し方の一日に過ぎずと見れ

ばめでたきも無し

ひぐらしを住ませて森の若やかさ輝くまでに

思ほゆるかな

消息の返し書く日もあらずとて世をはかなみ

ぬこほろぎ鳴けば

相寄りて秋を泣くなり百年の樂盡きし身とな

りぬらん

わがこころ玉ならずして瓶びんなりき冷たき水の

満ちてありける

目に見えぬ過ちごとを思ふ時若やかなりと人

のほめ行く

わが心はた彼かの心騒ぐなりわが涙落ちかの人
の泣く

草むらに白菊咲きぬ人よりも淋しき媚を知れ

る花かな

咲く花のたぐひとなすも天童と眺むることも

同じほかなさ

菊の花盛りとなれば人の香のなつかしきこと

限り知られず

白くして火よりも熱き香を放つ薔薇を皁月が

かたはらに置く

しら玉のちひさきを見て紅玉こゝろの流す涙と思ひける

かな

悲みを戀の焰の包む時青きけぶりのおのれよ

り立つ

若き身はいみじき煙立ちのぼる香の爐としも

思はるるかな

露いとど深き朝なり紅の菊女の身かと哀れな

りけれ

浴槽ゆまより溪を覗けば紅の菊魚かと見えて靡く

タぐれ

あかつきやものの印しの心地する眞白き菊の
 四本五本

大空も思ひ上れる人なども目に置かぬごと白
 菊の咲く

幸の小さきを捨てて禍の大なるものに變へんと
 ぞ思ふ

たそがれに髪かと思ゆ大木の紅葉のもとに渦
 巻ける水

薄の穂つひに野澤の水よりも白くめでたくひ
ろごりにけれ

おのれらは冬のきたると人間の一人あるをば

禍わざはひと呼ぶ

まばらなる星を涼しと語らひぬノオトル・ダム

の前の廣場に

衆人しゅうじんのよろこぶ時に悲めど彼等なけければわれ

も歎かる

し思はざる時も無しとて忘るるに勝ることとも

おもひ給はじ

目を伏せてゆきかひ繁き夕ぐれの街より來し

やうす色の菊

太陽の新しきをば得んと云ひ狂人は泣くわれ

もまた泣く

自らの行くべき方も經しあとも明かに見ゆあ

ちきなきかな

水色も桃いろも皆淡きゆる灰色となるわれの

こころも

九十九の次の数にも置かれたる大事負ひたる

身のこころちする

たなぞこの玉にならべて春風は眞紅の花を今

一つ置く（北村長吉氏の母君の扇に）

燻るらん火とやなりぬるみこころに我が落し

つるくれなるの薔薇

わが着たるうすものの袖あまりにもしけく靡
 けば雲かと思ふ

歎かれぬ紫の藻の匂ひより海を再び見ぬ如く
 われ

二十六都の北の洞門ほらをくぐれば草に秋風ぞ吹

く (以下廿二首明星温泉にて)

旅人は山萱草やまぐんそうの匂ひをば先づなつかしむ馬車
 を下りて

日の沈む方も見えすて暮れゆけば心さびしき

山莊の客

雲靡き山の秋風通ふなりわが浴室の鏡のうち

に

しらじらと雲と水との起き出づる浅間の山の

朝の溪かな

手すさびに地檜草などもあそぶ人も混れり

山莊の客

雲よりもあまた重ることにより信濃の山は悲
しかりけれ

淋しくも四面しめんの山と自らの親むと云ふ證あかしまだ
無し

山の湯に石の柩の静けさを思ふ涙もおちにけ
るかな

水の音烈しくなりて日の暮るる山のならはし
秋のならはし

山莊は朝も夕につづくごと淋しき霧の立ち迷

ふかな

浅間山煙するなり人々の高き杖より二尺のう

へに

うら悲し北の信濃の高原の明星の湯にあるこ

ともまた

水色の空も來りてひたるなり浅間の山の明星

の湯に

信濃にてわが見る雲の色などもうらはかなし
 や消息に書く

落葉松かばらまつの下葉のすでに黄なるころ彩羽さいはの鳥の
 山やまに下くだりぬ

千條せんじょうの鎖くさりは引かで來つれども都をわれも人も
 思へり

悲しけれ信濃の國の高原の薄すすきのうへの落日の
 舌

山の夜や星に混りてあるごとく高き方にて鳴
けるこぼろぎ

わが踏みて浅間の砂のくづるるは悲し鬼界が
島のここに

山の菊かづらのさまに靡くなりたのみあはで
は淋しきがため

秋の日が黄なる酒をば塗りつらん心ほのかに
酔ひて山見る (以上)

目の前に蘭陵王を舞ふ蜻蛉いみじく清く日の
暮れてゆく

唯一人われ選ばれて秋風に立ちも向へる心地
こそすれ

青やかに松立つ街のめでたけれ白馬に乗れる

初春の風

人とわれ更にこころの近づくと正月の日は思
ひこそすれ

人の子の解くべき謎も皆解けし日かと覺ゆる

元日の晝

上もなき幸ひびとにあらずして物思ひつつ春

をよろこぶ

白き羽子心のあがるさまに舞ふ少女子達のつ

どふ大路に

正月の心の上を戯れて走ると見ゆるひる過ぎ
の雪

ささやかに椿が被^かく雪のみは彌生の日まで置
くよしもがな

元日やめでたきものを納めたる箱のこちす

黒き机も

われも云ふ正月の富士高きかな真白きかなと

子等に混りて

わが戀も春に背かず伸び行くといとやはらかに
思ふ時かな

九段より下に神田の白き道見るだに春は心と

きめく

工^ら人が運び入れたる春ならぬ證^{あかし}をわれの立て

んとぞ思ふ

いつしかと椿の花のごとくにも繋^{つな}がれてある

君とわれかな

春の日に長き橋をば渡ること静かなれどもう

ら淋しけれ

百年のむかし巴里の群衆の立てつる聲に似た
る樂音ガク

今よりも廣きところに居んとしてわれ思ふの

み天上のこと

わが心涯をなすらんここにのみ冷たき雪の深
く積むかな

圓やかに棧敷の段をめぐらせて眺むるもわれ
踊れるもわれ

自らに最も近く居るものを見ぬごと知らぬ如
くすわれは

雪の山北の窓より覗かねど寒き日のある家の
内かな

大きな寶たからか小ちひき玉なるか身を知るごとく知
らぬが如し

何となきことに心の動くなり生れしままの人
のならひに

面白く雪にまじりて飛び歩くかかる心をわれ

も今日持つ

うす白く青く冷たき匂ひする二人が中の戀の

錆かな

浴室を出でんとすればふつつかに木立を鳴ら

し山風は逃ぐ

淋しくも箱根に似たる露立ちぬ山の溪よりわ

が心より

或時は颯風に乗れどはかなしや翅つばさを持たぬ人

間のわれ

初夏の空より射たる光にもいまだめでたき身

と見ゆるかな

この人は痴ち愚ぐか悲しき悪心かなほいと若きわ
れと思へり

二日ほど山に遊びて別れたり斯くしも歎く浦

島のごと

雑草の二人静は悲しけれ一つ咲くより花咲か

ぬより

しろがねの笛の細きも燃ゆる火の焰の端も嘗

むるくちびる

北海の氷にひたし烈日の下に心をさらすたは

ぶれ

橋の小島が崎の雲も居ぬ水のさまなる夕ぐれ

の空

わが盛^{さか}終りしごとく序の曲の初めのごとく惑
ふ時かな

しろがねの風青^{せい}玉^{ぎよく}の清き風泉にかくれ初秋を
待つ

自らを頼まず同じ花あまたつらぬる椿つらつ
らつばき

わが胸の黄金^{こがね}の臺に載せたれば悲みも皆花の
ごと見ゆ

おのづから今日に及べば君を先づわれよりさ
きにほめんとぞ思ふ

櫻とく咲きたる春とおどろきぬわが送る日の

いと寒きため

鵠沼の松の間に来て遊ぶ波かと思ゆる春の雪

かな

しどけなく遊びつかれし身のやうに人を見上

ぐる木の下もとの雪

砂山の小松の春と青の雪なよらに居寄りむつ

語りする

春の雪樓利天をばゆめみたり育王塔のかたは

らにして

くれなるの雲の中より浮き出でて蓬萊めける

春の山かな

曼陀羅のかの極樂の樓臺に眺むるとき山の

夕映

縹はたして砂にひろがる春の水露になびける天城

足柄

何ごとに心の足るか知らねどもちたく香を

ば散らす梅かな

温室の花おく棚にしのみきて戀のごと死ぬ春

の雪かな

明星は歸らん國ももたぬごととり残されて秋

風ぞ吹く

風のごと流れ去るべき人の身にふさはぬこと
を數知らずする

音高く鳴る鈴を皆とり捨てぬ昨日に變ること

はこれのみ

人間は愁多しと思へどもさらに哀れに夜の雨
ぞ降る

とりつれば高くも浪の音添ひぬ悲しき枕備へ
たるかな

洛陽の太厦も塔もここよりは侮らはしく傾き

て見ゆ

(以下八首葛飾の十橋莊に再び遊びて)

空青し雁のわたるを眺むらん孝標の女も國府

の館に

珊瑚の木紅き奥より鐘鳴りぬ江東の野のあた

かくして

山莊の鐘のひびけば艶めかし池の翡翠の人見

よと立つ

わが踏みて玉の床より冷たけれいかかすべき

ぞ山莊の橋

水草はうらがれたれど池に居て十一月の青空

を敷く

夕かぜの渡ると見えてはかなけに吊橋うごく

草の奥かな

山莊の廣き戸口に唐鐘の瘦せてかかれる夕月

夜かな (以上)

身の半焔に巻かれ寂光じやくわうの世界を見るも戀の不

思議ぞ

美しくきまことの媚はわれのみす天地てんちと云ふ

戀人の前

われの見て諸人しよじんあまりはかなけれ中の二三は

めでたきに過ぐ

紫むらさきに墨すみしみ入りてわが心淋し銀絲ぎんしの紋を縫は

まし

自らを勝れしものと覚え初め滅びに逢はん力

蓄ふ

手に取れば戀しき人を見んとする心のすすむ

白菊の花

今日もなほ抱く心のさまさまに定まらぬをば

樂めりわれ

春いまだ淺しいみじき水仙の花のやうなる夕

月夜かな

散るものは雪ならずして大空の二月の春の星
の花びら

しら波の光の絹はひろごりてやがて破れてあ
とかたも無し

ひとところ落椿して地の底の焔と見ゆる溪の

路行く

秋の空冷たき水の中に立つうら悲しさを語る

月かな

こしかたの暗き世界の洞門ほらに別れて仰ぐ青玉

の空

人間の世は冷たしと淺間山峰の煙のとどまら

ぬかな

空にして圓まかに薔薇の咲きめぐる太陽を愛づ

戀に次ぎては

夕月の光のいろを散りてなほ半日はつじつばかり變へ

ぬ薔薇かな

夕闇に透かし見るなり薔薇の花いまだ生れぬ

世界のごとく

わが掛くる白玉しらたまの環と薔薇の花相照ることも

淋しかりけれ

むさし野の蒲田はなだの薔薇の園を行く夕闇どきの

水の音かな

夕闇やいみじき人もふつつかに身を曲げて愛

づ薔薇の花など

しら玉をさぐる海人あまよりときめきて薔薇の園

生の夕闇を行く人よこころをささげて

山川の岩にかかれる白波のさましておつる夕

ぐれの薔薇

人もまた目におかず散る花なればわれさへ知

らず薔薇の心を

逆しまに青き空をば抱く薔薇ルノワアルをば

仰ぎたる薔薇

薔薇あまた散りぬここより天地の缺けも崩れ
ん心地するかな

心より焰の立ちぬ薔薇の香のかたはらにある

春の日の人

われを知る見えぬ力に支へられ咲く太輪の薔
薇の如しと

唯一人遠く遙かに見て寒し海を歩める棧橋の

脚
(以下十一首人々と湘南に遊びて)

ほのぐらき砂に紛れて暮れ行けばまた音もせ

す砂濱の川

數知らず伊豆の島より流れくる椿の花と見ゆ

るいさり火

砂の山天城のかしら足柄によそへんほどの白

雪を置く

何ごとに聲を忍びて寄るならん相模の海のあ

かつきの波

白秋の雀が歩く白紙さへ雪かと見えて朝の寒

けれ

美しくしき星の消えぬと衣をば上にまとひて惑

ふ浴室

水晶の燈籠のごと木のもとに輝く雪を見出し

ぬわれ

腰越の音無橋をわたる時くづれし溪の雪も悲

しき

太陽は海濱院の爐の中にかくれて空の曇る晝

かな

鎌倉の師走十日のはだら雪悲しきいと人も

思はん(以上)

空もいと近きところと見なされて雪のふる日

はなつかしきかな

屋根の雪解けて再び雨と降るさらに涙となら

んとすらん

太陽と薔薇 終

大正十年一月五日印刷
大正十年一月十日發行

太陽と薔薇
定價貳圓五拾錢

著者 與謝野晶子

發行者 東京市神田區中猿樂町十五番地
合資會社アルス代表者
北原鐵雄

發行者 東京市神田區中猿樂町十五番地
鈴木泉藏

印刷者 東京市小石川區久堅町四十五番地
山本源太郎



發行所

合資會社
東京市神田區中猿樂町十五番地
アルス

振替東京二四八八八番
電話九段二一六九番

與謝野晶子夫人著

激動の中を行く

(評論集)

定價壹圓八拾錢
送料十二錢

アルスの詩歌集

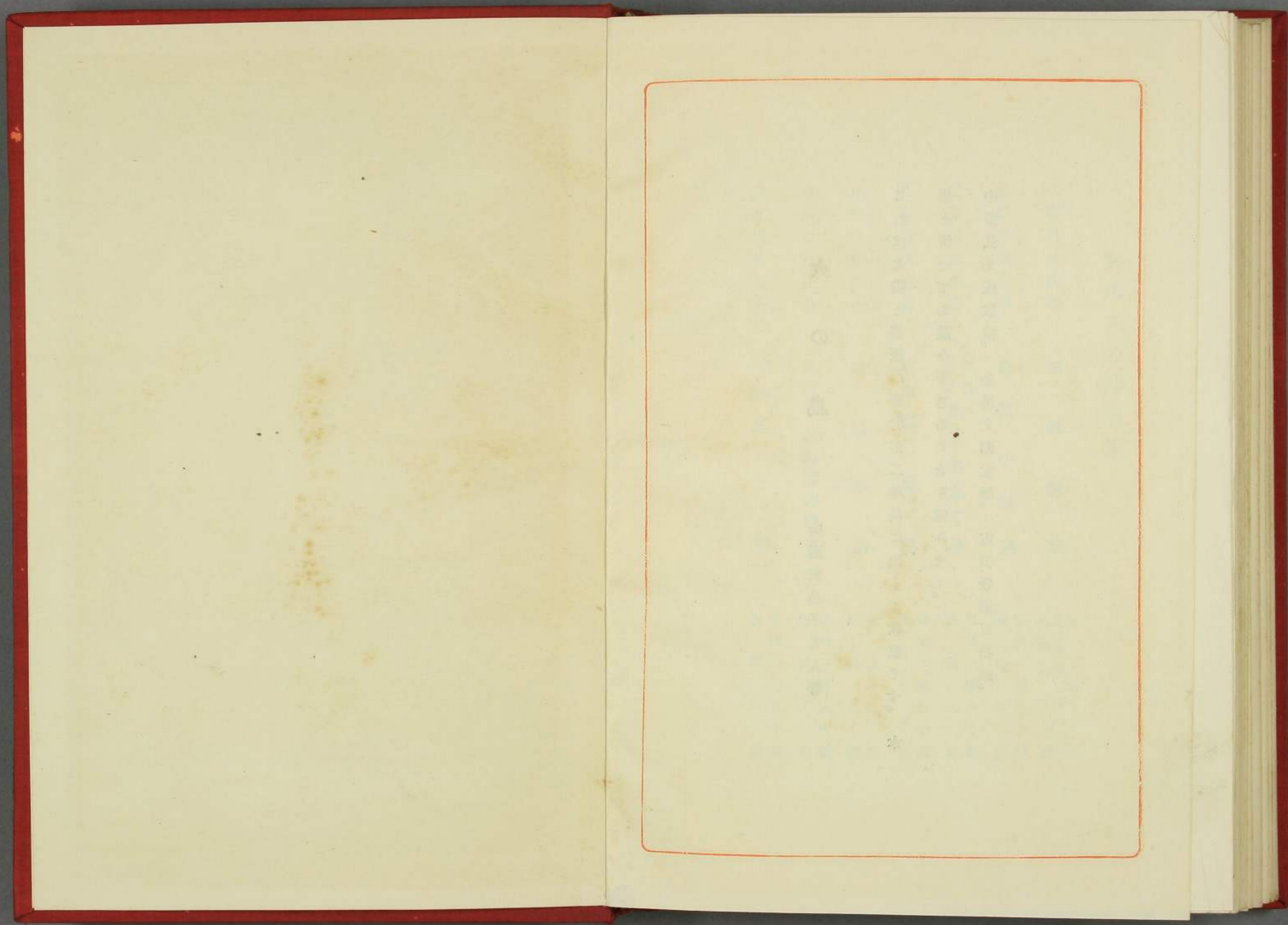
北原白秋氏著	白秋詩集	全二冊 定價各冊二圓八十錢 送料各十二錢
北原白秋氏著	白秋小唄集	定價一圓八十錢 送料六錢
北原白秋氏著	抒情小詩 わすれなぐさ	定價一圓八十錢 送料八錢
北原白秋氏著	歌集 雲母集	定價二圓三十錢 送料十二錢
北原白秋氏著	白秋小品集	定價二圓 送料八錢
北原白秋氏著	童謡集 とんぼの眼玉	定價一圓九十錢 送料十錢
三木露風氏著	抒情曲 生と戀	定價一圓八十錢 送料六錢

火の鳥

與謝野晶子夫人著

これは「太陽と薔薇」の著者が二年前に出した歌集です。本集と併せてお読み下さることを望みます。

中澤弘光氏装幀。金尾文淵堂版。定價壹圓五拾錢。



12